

Title	日本キリスト教史研究のひとこま：村岡典嗣と大内三郎氏
Author(s)	鵜沼，裕子
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume12：67-76
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2814
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

日本キリスト教史研究のひとつま

— 村岡典嗣と大内三郎氏 —

鵜沼 裕子

一九九六年一月七日に行われた「日本プロテスタント史研究会」の第五二九回例会は、大内三郎氏が、「日本キリスト教史の方法―村岡典嗣について―」と題して講演をされる予定になっていた。ところが氏の健康上の理由から急にそれが不可能となった。すでに講演の当日も差し迫っており、代講者をたてる余裕もなかったので、私が氏の原稿と資料をお借りして、急速、代わりに発表させていただくこととなった。原稿は『追想 村岡典嗣小記』と題された、四百字詰め原稿用紙約三〇枚ほどのもので、氏と村岡との最初の出会いの想い出に始まり、日本キリスト教史の研究上、氏が村岡史学から得たものについて述べられたものであった。資料としてはこのほかに、氏自身が病床で口述されたことの簡単なメモなどがあったが、そもそも原稿自体が未定稿で、必ずしも研究発表用として完備されたものはなかった。そこで研究会ではこれらのかなり断片的な材料をもとに、ほぼこのような話をされるつもりではなかったかということ、私自身の解釈を加えて再構成して発表させていただいた。それを文章化したのが本稿である。しかし私自身、かねがね、大内氏から氏自身の日本キリスト教史研究の方法について、一度きちつと話を伺い、何らか

のかたちで公にできたら、と思っていたので、このような機会を与えられたことは非常にありがたいことであり、ときには居ずまいを正す思いで読ませていただいた。本論は、ほぼこのような事情のもとに書かれたものであることをご承知の上でお読みいただければ幸いである。

1 村岡典嗣との出会い

大内氏と村岡との最初の出会いは、昭和の初期、氏が旧制中学生の頃のことであった。そのころ東北大学の正門近くの構内に、一般市民も行き交っていた通路があり、氏が「村岡典嗣先生」と出会うのは、偶然のことながら、いつもこの正門のあたりであった。たまたま村岡の子息が大内氏の友人であったことから、大内氏の側からの「一方的な顔見知り」に過ぎなかったのだが、いつも黙って行き過ぎるのもおかしく思い、その都度脱帽して会釈をするようになったという。「先生が、当時わが国唯一の日本思想史学研究室（正確には「文化史学第一講座」）の主任教授であったことを知っていたのは、仙台が狭い地域であったからかもしれない。」（大内氏の原稿から。以下、大内と略記。）しかしながら、当時大内氏は日本思想史にあまり関心がなく、村岡の知遇を受けないまま仙台を去って東京大学文学部倫理学科に入ることとなり、村岡は一時遠い存在となった。

ところが一九三四（昭和九）年、和辻哲郎が東大文学部倫理学科の教授に着任すると、講師陣も一変し、翌三五年から村岡が非常勤講師として週四時間の講義を担当することとなった。その年は時間割の都合で聴講できず、翌年から出席することとなった。夏期休暇前の前半期は『神皇正統記』と『愚管抄』の講義であったが、大内氏に言い知れぬ衝撃を与えたのは、休暇明けに村岡講師が新しい学期の講義題目として、いつもと代わらぬ淡々とした調子で「切

支丹時代」と書かれたときのことであった。「日本思想史研究についての私の無知と言われればそれまでだが」（大内）、当時すでに村岡には、『吉利支丹文学抄』（一九二六）、『ぎやどべかどる』、『妙貞問答』他の校訂（一九二七、『日本古典全集』に収録）などの業績があった。しかし、大内氏が「切支丹」という講義題目に衝撃に近い驚きを受けたのは、村岡といえは本居宣長の研究者としてしか知らなかったからではない。いわゆる「日本精神」が喧伝された昭和十年前後は、日本思想史学は当時の言葉で言えば、いわば「規範学」であり、「日本精神」を規範的に捉えて呈示しようとする学であったからである。従って、「日本は神国たる処、きりしたん国より邪法を授之儀太以不可然候事」という豊臣秀吉の「伴天連追放令」以来、後期水戸学の『新論』や近代の「内村鑑三不敬事件」に見るように、「日本神国観」からキリスト教は邪教視される風潮の中にあり、大方の日本思想史研究では、キリスト教が表向きに取り上げられ論議されるということは絶えてなかった。しかも、それ以上に村岡講師の講義が大内氏にとって印象的であったのは、その取り上げ方自体であった。西洋文化史を専攻された村岡講師は、切支丹を西洋思想として何の違和感をも感じさせずに、ごく自然な、淡々とした口調で講義されたのである。それは氏の心に静かに染み透っていた。「日本思想史研究の上でプロテスタント・キリスト教の研究も十分学問的研究の対象になり得る」、そんな暗示を受けた思いがした、と氏は述懐している。また氏の病床からのメモにも、「日本キリスト教史研究の方法に関して私は、東北大学名誉教授村岡先生から最も多くの影響を受けました」とあるように、大内氏の日本キリスト教史研究は村岡との出会いに始まり、村岡史学の方法に影響を受けながら構成されたものと言えよう。（私は学生時代、大内先生から、和辻ゼミのテキストとして新渡戸稲造の『武士道』を与えられ、このような文献が学問研究の対象になると知って目を開かれる思いがした、という意味のことを伺ったことがある。それゆえ、大内先生のキリスト教史研究はむしろ和辻によって触発されたものと思っていた。しかし本稿を作成したことによって、先生のキリスト教史はむしろ

る村岡との出会いに始まり、村岡史学の方法に多くを負っていることを知ることができた。)

2 村岡思想史学の方法

次に大内氏が述べようとされていたのは、村岡自身の日本思想史研究方法であるが、その内容は、ほぼ村岡の文章「日本思想史の研究法について」(同著『続日本思想史研究』一九三九所収)の祖述であるので、ごく簡略に本稿に必要なポイントのみを紹介するにとどめる。

周知のように村岡は、一九二二(大正一一)年から二年間、文部省の在外研究員として英・独・仏に留学し、ドイツの文献学者ベェク(August Beek, 1785~1867)の文献学(フィロロギー)と出会い、古典の再認識(Erkennen des Erkantes, 「認識されたものの認識」という、ベェクの文献学の方法を学び取った。「その認識が、あくまでも(古典の)再認識、即ち認識の再現たる性質に於いて、どこまでも主観的産出とは別に、客観的再産出たるところにその学的特質を有する。」(村岡典嗣・前掲論文、前掲書三二頁、以下、頁数のみ記す。))そして村岡は、日本近世において国学が行った古典研究が、このベェクから発展したドイツのフィロロギーと、独立に発達しつつまさに同種の学問として立派に成立を遂げたと思、とくに本居宣長の古典研究をベェクの業績に比すべきものとして評価している。すなわち、宣長の「うひ山ぶみ」における学問の定義に、「古書とはすべて後世の説にかかはらず何事も古書によりその本を考へ上代の事をつまびらかに明らむるの学問なり」(『本居宣長全集』第一卷一五頁)とあることに注目し、村岡は国学の重要な特質を文献学と規定し、「古典の再認識」というベェクの文献学と同質の方法を国学、とりわけ本居宣長の古典学の中に見いだしたのであるが、これが村岡自身の思想史の方法ともなったのである。

3 具体的方法

村岡によれば、日本思想史の研究方法は文献学的段階と史学的段階に大別される。文献学的段階は、さらにいわゆる資料批判と釈義・了解とに小別されるが大内氏の関心は後者に注がれる。釈義とは「資料を個々に又連結して、その意義を正解すること」(村岡・三九頁)で、大内氏によればこゝにHermeneutik(解釈学)が始まる。これは、「個々の語義のそれ(正解)から全体としての意義のそれに移る一つの過程」でありここでは、「解釈家の主観的成心をさしはさむ事なくして、当の資料をありのままに解釈するといふこと」(村岡・三九頁)が求められる。ここでは一々の語句の吟味分析とともに、全体を総合的に捉えることが要求される。すなわち、「さらに進んで資料たる文献を全体的又部分的に、一つの思想的単位と見て、一層綜合的見地から、その意味を理解するのが了解である。釈義が觀念の認識を目的とするのに、了解は思想のそれを目的とするとも言へる。こゝにいたると、他の思想、しかもそれは必ずしも文献そのものに明瞭に意識的に言ひ現されてをるとはいへない思想を、解釈者が、或場合には意識化してさへ再認識することを必要とする以上、釈義の場合に比して、はるかに解釈家の想像力に俟つべきものが多い」(村岡・四〇頁)。

こゝが、大内氏自身が「最も関心を抱いている点」とされる部分であり、「同一の事象を扱ひながら、思想史学者の間でなぜこゝも「思想の性格」(記述された歴史像の意?)が異なってくるのか、という氏自身の問いに関わってくるところでもある。それは、釈義の段階では単に客観的エレメントとしての語句が対象であったのに対し、この第三の了解の段階でいよいよ研究者の「了解に主観性を帯びるようになる」(大内)からである。「思想が思想である以上、そこには総括的統一性がなくてはならないが、それは解釈する当事者のPhantasiaによる。してみると、同一の事象を

対象としながら、そこに捉えられる思想の性格の相違はこのPhantasieの相違に由来することを示している」(大内)。

さて、文献学の段階は必然的に歴史的段階へと発展する。作業がこの段階に進むとき、ことは全く異なった様相を呈することとなる。すなわち、了解の段階では、研究者に要求されるのは静態的なPhantasieであったが、歴史的発展の総合統一的把握は動態的でなくてはならない。そして、「発展とは……必ずしも直線的の進歩を意味しないが、しかし終局の理想を目的としての、進行の過程である。……選択された資料について、かくのごとき発展を明め来るとき、こゝに様々の関係のうちに一貫しつゝ展開して、最高価値即ち理想へと帰趨し行く思想の道程が、明らかにされ、そこに思想史が成立する。而してこゝに至ると研究者の活らぎの関与する餘地が、頗る多いと言はねばならぬ」(村岡・四二頁)。このように、村岡が個々の思想やその発展を統一にもたらすために「理想」を要請しているところ、大内氏は最も大きな関心を寄せる。すなわち、この「発展は、研究者によって考へ出されねばならない場合が多く、歴史は決して例へば鉉脈が地中に伏在して、発掘を俟ってゐる如きものでない」(村岡・四二頁)。研究者の使命は自己の哲学によってこの思想が「理想」へと向かう道程を明らかにすることにありるのである。

以上が村岡と大内氏との関係、および村岡史学から大内氏が学びとられたものの概要である。そこで次の問題は、この村岡の史学が実際に大内氏のキリスト教思想史にどのように生かされたかということである。

4 大内氏の日本キリスト教史

上述のように、大内氏の村岡への関心は、当時の時代思潮の中での、切支丹に対するきわめて「寛容」な扱いに魅

せられたことに始まるが、それは次第に、村岡の日本思想史研究の核心である方法そのものへと移っていった。以上のような経緯からして、大内氏の日本キリスト教思想史研究の課題は、日本のキリスト教という素材をどのように村岡の方法にのせて歴史像に構成し、記述にもたらしめるのか、ということになってくるであろう。ここに新たに登場するのが故石原謙の存在である。大内氏の回想によれば、時代は下って石原が『日本キリスト教史論』（一九六七）を上梓した前後のこと、大内氏に、「自分は日本キリスト教史を、大変おどろきっぱではあるが、日本基督公会の『公会条例』（一八七四）から日本基督教会の『信仰告白』（一八九〇）を経て現在の日本基督教団の『信仰告白』（一九五四）を貫く線で考えているが、如何なものか」と意見を聞かれたことがあった。咄嗟のことで、大内氏は即答できなかった。当時、氏はこの三者を日本キリスト教史の重要なポイントと考えていないではなかったが、日本キリスト教史をその線で構成するまでには考えが立ち至っていなかったという。しかし、「これは日本キリスト教史になりうる」と考えたので、先生（石原）に促されるかたちで、「充分、考えられます」と答えた。その後このことを反芻するうちに、石原の指摘が、日本キリスト教史の構成方法を考えていく上で、きわめて示唆的であることを、次第に認識するようになっていった。「もともと私は教会をもって日本キリスト教史の基軸をなすものとみていたが、この三つの『信仰告白』の制定は、いずれも日本キリスト教史発展の上での大きな節目にあたる出来事であり、この三者をいわば幹線として日本キリスト教史を記述することができることを、驚きをもって見いだしたのである」（大内）。もと私（大内）は教会を事実史を中心に捉えてきたが、私（大内）の教会史叙述では上記の三教会がいずれも『信仰告白』によって連結されている点に注目されたい、なぜなら、『信仰告白』は教会を教会たらしめる核であり、これを喪失したとき、教会はもはや教会ではなくなるからである、と氏は言われるのである。

今、氏の言われようとするところを筆者なりに言い換えれば、村岡のいう「発展」、つまり「歴史は終局の理想をめ

ざす過程である」という主張との関連で、大内氏はこの三教会の『信仰告白』を貫く福音的信仰理解に日本キリスト教史の「終局の理想」を見いだし、これを基軸とする三教会の形成発展をあとづける作業をもって日本キリスト教思想史の体系化をめざそうと試みられたのだ、と言えるのではなからうか。(筆者はかつて大内氏から、日本のキリスト教史は上記の三教会を基軸として構成すべきであり、その他のもろもろのキリスト教運動、たとえば社会的キリスト教や無教会主義などはすべてこの基軸との関連で位置づけるべきである、という意味のことをうかがったことがある。)

5 事実史と思想史

そこで問題は、教会がいかにして日本という土地に根づいていったかという「事実史」の解明と、そこに理念としての信仰告白がいかに具現されていったかという「思想史」とを、どのように具体的に関連づけてつ、いかに全体としての思想史を構成していくかということになるであらう。実はこの点が最も重要かつ難渋な作業であり、大内氏のキリスト教史のポイントでもあると思われる。大内氏自身の病床からのメモにも、「一番苦労したのは、思想史と事実史との配分、組み立てです。両者のどれを欠いてもいけません。私は両者(思想史と事実史)を生かすために苦労しました」と認められている。

しかしながら大内氏の原稿には、上述の基本的構想をいかに具体化するかということに関しては、方法論としてはこれ以上、何も述べられていない。従って、この氏の試みが成功しているか否かについての吟味検討は、それが方法として適切かという基本的な問題から、個々の事例についての検討も含めて一氏の衣鉢を継ごうとする者が大内氏

の『日本キリスト教史』(一九七〇)に即してなすべき課題であらうと考える。

付記：この稿を三分の一ほど書き上げたときに、私は大内先生の訃報に接した。先生のお体がご年齢以上に衰弱しておられるということは、ご家族から聞き知ってはいたが、学生時代から教会史について文字どおり手とり足とりのご指導をいただき、私的にも家族の一員のように受け容れていただいていた私にとって、先生のご逝去は(年齢的には少し近すぎるのだが)まさに慈父を失ったような悲しみであった。今まで、拙い論文ができ上がるたびにお送りしてご批評をいただくのを何よりの楽しみとしていたのだが、もうあの独特な筆跡でのご返事が永久にいただけなくなってしまうと思うと、堪え難い悲しみを覚える。先生は、この拙い文章を天上でどのようにご覧になっているであろうか。先生によって天上と地上とをつながれた思いで、私に残された日々をささやかな研究にいそしんでいきたいと願っている。

なお、私事にわたるが、私も大内先生との偶然の出会いが機縁となって日本キリスト教思想の研究に入った者であり、「出会い」というものの奇しさを思わずにはいられない。私は大内先生が拓かれた道をそのまま継ごうとする者ではないが、私が現在、このようにして在ることの背後には、歴史を織り上げている数知れぬ糸の中の一本が確かに存在していることを、今、つくづくと感じている。

(聖学院大学教授)